



立命館大学 経営学振興事業だより

Across

INTERVIEW 飛鳥井 雅和氏 元KBSアナウンサー

立命出身というよりRBC出身です — 蹴鞠の家柄から放送の世界へ —

今回は元KBSアナウンサー、そして立命館大学放送局RBCご出身の飛鳥井雅和氏にご登場願いました。世の中不況一色ですが、こういうときにこそ、原点に戻りたいと思い、世に立命館スピリッツを発信してこられました飛鳥井アナウンサーにお話をいただきました。

現在は三足のわらじを履いています

<松村> 2002年にフリーになられたということですが。

<飛鳥井> はいそうです。私は立命館を出てすぐ、当時はラジオ京都と言っていましたが、いわゆる京都放送にアナウンサーとして入社し、無事なんとか38年間勤め上げました。生まれは1942年ですから、2002年で60歳の定年となりました。KBSアナウンサーからフリーアナウンサーになったというだけで、何ら内容的には変わりありません。

当然ながら番組はうんと減り、現在レギュラー番組は1本だけなんです。特別番組などが入ってきますのでそのままアナウンサーとしての生活は変わりません。もうひとつは、サラリーマンを解放され時間ができました。声をかけていただいたところがあったので大学の非常勤講師をして、若い人達と勉強したりしています。後は司会業と申しますか、今日もこれから叙勲パーティがあるのですが、そう言ったパーティや結婚式での司会だ



とかがありますから、言うなれば現在は三足のわらじです。いわゆるラジオ・テレビでのアナウンサーとしての仕事、それから、おこがましいんですが大学での講師、それから司会業という、三足のわらじを履いて機嫌良く過ごさせていただいております。

<松村> いろいろ調べさせていただいたのですが、京都橋大学でしたっけ?

<飛鳥井> 京都橋大学と大谷大学、それから京都らしいのが裏千家さんが専門学校を持っていらっしゃる、裏千家学園茶道専門学校という、そちらにもちょっとお邪魔しています。

<松村> それは、若い人たちに何かお話されるような……。

<飛鳥井> ひとつはお茶の専門学校ですからお茶と、それから一般教養という科目がありまして、例えば、美術史、社会、英語、能楽等ありますが、私は主に専門のコミュニケーションとか話し方ですね。将来お茶の指導者など先生になれる方が多いので、指導者としての話し方とか、そのようなことをしています。私も話を聞いてびっくりしたのですが、京都にそう言う学校があるのには知りませんでした。

<松村> 私も全然知りませんでした。

<飛鳥井> 知らなかったでしょう。3年間の全寮制の学校なんですよ。

<松村> それは、いつ頃からあるんでしょうか。

<飛鳥井> けっこう歴史があるみたいですよ。昭和40年代ぐらいからじゃないですか。

(参考：裏千家学園茶道専門学校は、昭和37年に茶道研修所として設立されました。その後、昭和46年に裏千家学園となり、51年に専修学校として再発足。さらに58年には学校法人裏千家学園として独立し、よりいっそう充実した茶道教育の場として現在に至っています。

<http://www.urasenke.ac.jp/school/gakuen/gakuen.html>)

<飛鳥井> 僕はフリーになった6年前に、当時は家元でしたけれど、大宗匠から「お前暇になったら来い」と言われて行っ

たんですが、行って教室に入ってびっくりしました。高卒の18歳の子から、明らかに僕より年の上の人がいるんですよ。「失礼ですが、こちら（教壇）へお立ちになったほうが良いんじゃないですか」と言ったら、3月まで高校の校長をされていましたか。すごく幅が広いんですよ。

<松 村>全寮制ですよ。そういう年配の方も寮生活ですか？

<飛鳥井>ええ、びっくりしました。全くの余談なんですけど、いかに京都らしいなと思いましたね。

蹴鞠の家元飛鳥井家

<松 村>ところで、「飛鳥井」というのは由緒正しい名前だなあと思ったんですが。実は私は西陣の生まれなんです。

<飛鳥井>ああ、なるほどなるほど。

<松 村>近くに白峯神宮などがありまして、それが飛鳥井町というんですね。で、その由緒正しい、蹴鞠の家柄というか、家柄としてはそう言う事なんですか。

<飛鳥井>ええ、そうなんです。で、僕は本家筋ではないんですけど、本家は蹴鞠の飛鳥井です。あの場所にはお屋敷があったんです。明治のご維新の時に、天皇と一緒に東京へ行ったんですよ。で、当時京都市民は、京都へお帰りになると思っていたらしいんですが、陛下ご自身はもう帰らないと。側近の者たちにもそのように伝えまして、家屋敷を処分してくれということでした。それでその屋敷跡をどうしようかと言ったら、神社を建てたいというお申し出があって、そこでご祭神は別ですが、飛鳥井家の守り神は精大明神と申しまして、これと一緒に祀りいただけるのならば、神社として土地を寄付しようということになったのです。おっしゃるとおり、飛鳥井家は蹴鞠の家柄ですので、鞠の神様の精大明神が祀ってあるということで、ご本尊よりも有名になってしまったのですね。

<松 村>白峯神宮と言うことで。

<飛鳥井>ご祭神は、崇徳天皇をお祀りしていらっしゃいます。脇に末社として精大明神も一緒に祀りいただいているんです。それが蹴鞠の神様と言うことで、最近のサッカーブームでJリーガーをはじめ、鞠を蹴ると言うことで、鞠の神様、サッカーの神様になったんです。それが発展してスポーツの神様ともなっているらしいですね。

<松 村>なるほど。いやあ、私なんかは子供の頃遊びに行った所なもので。社務所で同窓会したとかそんな記憶があるものですから、今回のお話を聞いて、正直申しましてそう言うところだったのかと再認識した次第です。

<飛鳥井>ええ。本来、これもご承知かと思いますが、サッカーと蹴鞠って同じ鞠を蹴るんですけども、似て非なるものでしてね。蹴鞠というのは何回ラリーが続くかというのを楽しみますが、サッカーは相手のゴールに蹴込むのがサッカーですから、全然主旨が違うんですけど、鞠を蹴るという共通点で、今脚光を浴びてお参りが多いようですね。ですから、あのあたりの町名は飛鳥井町という。さすが西陣出身、よくご存じで。

<松 村>いえいえ。調べてみてはじめて、ああそうだったのかと言う事なんです。

<飛鳥井>一応何か書いてあるみたいですね。伯爵飛鳥井家の跡地に建てた神社であるというのは。

<松 村>元々、飛鳥井さんは京都ご出身ということで…。

<飛鳥井>そうです。元々京都なんですけど、先ほど話をしたように明治維新の時に陛下について行きましたから、本家は東京になっちゃってます。ところが、僕の叔父はずっと宮内庁にいたんですが、最終的に京都御所の事務所長になって京都に帰ってきたんです。ですから、また京都なんです。

<松 村>そうすると、飛鳥井さんご自身のお生まれも京都なんですか？

<飛鳥井>ところが僕自身は、実は横浜生まれなんです。これは親父の仕事の都合で、たまたま仕事で横浜に行ったときに生まれたいらしいんです。

<松 村>そうなんですか。では、いつぐらいから京都へ。

<飛鳥井>えーとですね。生まれてすぐまた京都へ戻りまして、親父が昭和19年に亡くなったもんですから、20年ぐらいに母方の親戚へ疎開したらしいんです。これが岐阜県なんですけれども、そこで結局家がなくなっちゃいましたからね、帰るに帰れず。京都に帰ってきたのが、実は立命館大学入学で帰ってきたんです。

<松 村>あー、そうなんですか。

<飛鳥井>ええ、ですから14年間くらい中抜けなんです。

<松 村>では、高校は岐阜で？

<飛鳥井>そうです。小・中・高と。

<松 村>そうですか。岐阜は言葉はどうだったのですか。標準語的なアナウンスは立命館で覚えられた？

<飛鳥井>そうですね。結局疎開者って言うのはやっぱり疎開者でしてね、地域になかなかなじまないんですよ。ですから、僕がアナウンサーになったって言うのは、ひとつはラジオなんです。当時は娯楽って言うのとラジオしかありませんし、ラジオが自分の親であり、兄弟であり、友達であり、すべてだったんです。学校とか友達遊びもありますが、それ以外はもう。ですから、ラジオには何となくあこがれを持っていたんですね。ラジオに出てくるアナウンサーというのはかっこいいもんだと。将来できたらああいうところに行けたらなあと言うのが、やっぱり子供の頃に



あったと思います。ですから、立命館大学に入って、その放送局というわけです。

学生時代・RBC時代

<飛鳥井>これは関西の特徴なんですが、放送部って言わないんですね。放送局って言うんです。同志社も同志社学生放送局、関西の大学の各局がそうだと思います。関東では、放送研究会（放研）とか、アナウンス研究会（アナ研）とかいうのですが、関西ではなぜか放送局と言いますね。

<松村>校友会直属でしたね。

<飛鳥井>そうなんです。中央パートという言い方でね。あれもありがたかったですね。

<松村>そう言う意味で、普通のクラブと違って別格みたいですね。

<飛鳥井>そうですね。それぞれの本部と同じ扱いでしたからね。学芸本部、学術本部、体育会本部、あと、新聞社、放送局、応援団、立命評論。それだけは中央パートの直属で、予算もいただいていたみたいです。

<松村>そうですね。学生時代は、最終的には部長とかはされたんでしょうか。

<飛鳥井>放送局の局長をやらせていただきました。

<松村>実は私は昭和38年入学なんです。

<飛鳥井>あぁ1年被ってますね。僕35年入学の39年に卒業で、無事4年間で出ました。

<松村>学生時代 RBC を聞いていたはずなんですが、全然記憶がなくて。確か昼食時に聞こえてたはずだと思うんですが。あのお、学生時代はどのような……。

<飛鳥井>今お話に出ました RBC という立命館大学放送局に入って、専ら4年間そっちばかりでした。僕は RBC にいてそのままラジオ京都に入ったんですけども、ラジオ京都より RBC が良かったくらいですね。すべてが。それくらい学生放送局とは思えないほど非常に充実していました。末川先生のおかげで立派なスタジオも作っていただき、学生放送局ですけど、一応アナウンサー、放送記者、ディレクター、技術員等々、それから放送劇団まで持っておりますね。

<松村>そうなんです。今はそんなの無いですよね。

<飛鳥井>無いですね。だから非常に学生放送局としては先端を行っていました。ですから、例えば東京の明治大学など、いろいろな大学から学生放送部をつくりたいって見学に来ましたね。立命の放送局 RBC はやっぱり日本のトップクラスでした。どんな風になっているのか、スタジオはどのように作るのか、全国から見学に来たくらいです。非常に我々の先輩が頑張っていたんでしょうね。それで、末川先生も大変理解してくださって、スタジオを、結構あの当時高かったんですけどつくっていただいて。

<松村>どこにそのスタジオがあったのか記憶に無いんですが、広小路ですよ。

<飛鳥井>広小路の研心館の3階、大教室の裏、つまり南側ですね。普通ではわからない所です。研心館3階に補助教室がありまして、その向かい側の梨木神社に面していました。



<松村>全く知りませんでした。

<飛鳥井>妙なデッドスペースみたいな所があったんですよ。急な階段昇って行って……。一般学生には気づかれないと思いますね。

<松村>教室にはよく行きましたけれど、全然気がつかないかったですね。

<飛鳥井>いわゆるまあ今で言うボックスですね。当時ボックスなんて言う言い方はしませんでしたけれど。スタジオと部室、そこに全部併設していました。みんな勝手に立命館大学放送学部アナウンス学科卒業と言っておまして。そして、衣笠にも広小路と同じようにスタジオがあり、毎日定時放送をやっておりました。

<松村>卒業生の方もたくさん放送関係に進まれましたよね。全国にはたくさんの地方局がありますが、そう言ったところにもたくさん行かれているみたいですね。

<飛鳥井>ええ、やっぱり多いですね。北海道から九州まで。

ローカル局KBSでは いろいろな経験ができた

<松村>ご卒業後入社された当時の KBS とはどのような時代だったんでしょうか。

<飛鳥井>僕が入社したのは昭和39年4月なんですが、当時はまだラジオ単営局でして、社名は京都放送と言っておりました。愛称はラジオ京都と言っておりました。ところが、39年10月に社名が近畿放送と変わったんです。KBS という。しかし、近畿放送はどこにある局だって聞かれるんですね。それで結局また元の京都放送に戻りました。

昭和43年でしたかね、テレビが開局したのが。UHF をはじめるということで。テレビを開業してラテ兼営局になりましたけれど、系列に入れない局なんですよ。いわゆる独立 U 局なんていう言い方をしていますけれど。ご存知の通り日本は全部ネットワークにつながって、朝日、毎日、読売、産経。テレビで言うと TBS、日テレ、それからフジテレビ、テレビ朝日の4つがありまして、あとから日経がちょっと遅れてテレビ東京とテレビ大阪と。私どもは全然それに入れなかったところなんです。ですから、もう非常に苦勞してました。今でも苦勞してますけれど。でもそれが逆に非常にやりがいがあったんです。

ほとんどの地方局は東京からの垂れ流しなんですよね。こういう事言うと怒られますけど。我々はそんなの何にもありませんから、全部自分たちで作るといいます。ですから、おかげさまで仕事面ではありとあらゆる番組をやらせていただきましたから、これは非常にラッキーでしたね。もう、はじめの頃は何でもかんでも作っていましたから。今ですと同様の立場なのが神戸のサンテレビです。例えばスポーツ番組で言うと、ウチが競馬を作ってサンに渡す、サンが野球を作ってウチに渡す、そう言う方式がだんだんとできあがってきましてね。競馬もやりましたし、プロ野球中継もずっとやってたんですよ実は。

<松村>プロ野球って言うと、当時はどの中継を？

<飛鳥井>主に西京極球場ですね。それからラジオは関西全部。大阪球場、甲子園、西宮、そういう所へ行って中継していましたね。

<松村>そうでしたか、ラジオがそうなんです、特に。

<飛鳥井>ラジオがありましたからね。プロ野球やって嬉しかったのは解説者が藤村富美男さん、土井垣武さんってわかります。

<松村>はい。黄金時代ですね。

<飛鳥井>もうね、今で言うと王・長嶋なんです。その人が僕の横に座ってくれるんです。

<松村>いや、藤村さんっていうとね、もう別格みたいな存在でしたからね。

<飛鳥井>すごいですよ。別格ですよ。もう感激でしたね。嬉しかったですね。スポーツ番組だと、僕はスポーツはあんまり詳しくないので解説者は横に良いの据えるからって、そういう良い解説者がきてくれるわけですよ。ラグビー中継やると言っても、僕はラグビー全然知らないから、横にちゃんといい人座ってもらうんですけど、岡仁詩先生という、同志社が全盛期に大学選手権から社会人選手権、日本で強かった名将なんですけどね。岡先生が座っていただけるとかね。それから、モーターボートってご存じですか？競艇。あれもね、天津のびわこ競艇を中継するんですが、ボートのボの字も知らない。そしたら、横にちゃんと解説者良いのつけるからって。誰が来るんだろうって思ったら横山やすしっていう漫才師。

<松村>あはは。そうでしたね。ボート好きでしたね。

<飛鳥井>あの人はボートの選手になりたいでしょうがない。だけど近眼でなれなかった。それで漫才に転向したんですけれども、ずーっとボートに乗っていてアマチュア選手権で連戦連勝していた。この人が横に座っていたんです。だから、ウチのプロデューサー、ディレクターがなかなか偉かったと思うんですよ。そういう人を探してきてね、横にちゃんと据えるから。

<松村>いやあ、今はテレビ局とか大手の局だったら、スポーツ担当とかナントカ担当とか分かれていませんか。ニュース担当とかね。

<飛鳥井>そうです、そうです。

<松村>KBSの場合ははじめからそう言うのは無かったですか。

<飛鳥井>ありません。余裕が無かったです。いやホント、正直なところ、普通でしたらスポーツ局とか報道局とか社会局とか政治局とかありますけれど、そんなの全然余裕があり

ませんし、人が足りませんし。でもとにかく番組は作らなくちゃいけない。で、とにかく、やれ、やれ、やれ、やれですからね。

<松村>当時、いや今でもそうかもしれませんが、何人くらいアナウンスの方はおられたんですか。

<飛鳥井>当時は30人くらいいたと思います。

<松村>それもやっぱり回すのは大変だったんでしょうね。自主制作ですから、多いですよ、番組の数が。

<飛鳥井>そうですね。ええ。いわゆる通常のレギュラー番組がありますし、ニュースは読まなくちゃなりませんし、それから当然ながら泊まり勤務はありますし。

<松村>それにラジオもありますから。すごい量がありますよね。その、放送量たるや。

<飛鳥井>そうです。例えば、夏になれば高校野球の地方予選やりますよね。これもラジオ・テレビでやるわけですよ。



私どもの場合、京都と滋賀県がエリアなんです。午前中西京極で一試合、昼から天津の皇子山球場行って第四試合とかね。これを我々はたすきがけと言ったんです。「おーい、今日は2人たすきがけだぞ」って。

<松村>それは相当いそがしいですよ。

<飛鳥井>でも、楽しかったんですよ。実に楽しかった。

<松村>おそらく他ではなかなか経験できないような…。

<飛鳥井>そうなんです。多分 NHK なんかでは絶対経験できない。弱小、零細企業であるが故にできる。そりゃ今から思えばあんなことよくできたと思いますけど。でも実際にやらせていただいて振り返るとすごく幸せでしたね。ありとあらゆるものをやらせていただきましたからね。

<松村>その中で、これが一番印象に残ったっていうのはありますか。

「タイムリー10」の記憶

<飛鳥井>そうですね。その中でひとつ、「タイムリー10」という番組をやったんですよ。これが1980年なんですけど、当時は、夜のゴールデンタイムにまともな番組をやらうよ、ニュースを中心とした報道番組をやらうよと言うんで、NHK が先行して磯村尚徳さんという方で「NC9」と言う番組を1978年か79年に開始されたと思うんです。民放も遅れてならじと、みんなわつとやらうとしたんですよ。でも、フタをあげたら、その80年4月

にスタートしたのはウチだけだった。僕はその「タイムリー10」を幸い担当させていただいて、これは実に楽しかったですね。

<松 村>特にどういうことが？

<飛鳥井>毎晩10時から11時まで、月曜から金曜までを生放送でやる。それを双方向でやろうというのです。いわゆる放送って言うのは、若者のリクエストは別として、当時テレビは特にワンウェイでしたからね。せっかく超ローカルで、しかも生でやるんだから、ツーウェイでやろうということになって、今では当たり前ですが、電話・ファクスでどんどん意見をもらおうと。

<松 村>当時だったら、やっぱり電話・ファクス？

<飛鳥井>ええ、電話・ファクスしか無かったですね。メールなんてものはまだ無かったですからね。それでどんどん参加していただいて。それから、政治的にも非常に面白かった時代で、京都からも面白い人が出ていたんです。田中伊三次だとか谷垣専一だとか、共産党では寺前巖だとかがね。滋賀では山下元利だとか宇野宗佑とかね。

<松 村>そうか、あの時代なんですね。

<飛鳥井>中央が大平総理で、三角大福中のギンギンガンで、いわゆる40日で解散やっちゃったって言う。その時の衆議院を解散させたのが田中伊三次さんなんですよ。

<松 村>議長でしたっけ。

<飛鳥井>議長。田中伊三次さんが開会のベルを押したんですよ。

<松 村>ああ、そうでした。

<飛鳥井>だから、自民党の造反連中が議場に入れなかったんです。だから大平さんの不信任案が通っちゃった。結局大平さんは衆議院解散に出て選挙中に亡くなっちゃったんですよ。そういう激動の時代だったんですけども、国会議員の皆さんがね、この番組なら出るって言うんでとんぼ返りしてくれるんですよ。6時に衆議院、国会終わったら間に合うと、10時の生放送なら。だから京都駅から直行で入ってもらって、喋々諷々と番組の中でもいろいろなことをやってくれましたね。それから、財政、経済状況でちょっと面白かったのが、冬場に灯油の値段がバラバラだったんですね。それで、電話で「お宅の灯油の値段お知らせ下さい」ってやったんですよ。そしたらね、1000円ほどの差が出てきたんですよ。

<松 村>当時は灯油って1缶でいくらくらいでしたか？

<飛鳥井>一番安いのは700円台でした。18リットルで。

<松 村>えっ、1000円違うって？

<飛鳥井>一番高いところが1700円くらいで、地域によってばらばらだったんですよ。

<松 村>安いのが700円ですか。それは無茶苦茶ですね。

<飛鳥井>それをね、電話が入ってくる度にボードに貼りだしたんですよ。生放送ですから「ウチは900円だ」「ウチは700円だ」「ウチは1700円取られたよ」って、もう、物凄い面白かった。「その値段はどこだ」ってなって。スタッフはフォローが大変でした。

<松 村>そうですか。

<飛鳥井>ええ。そんな面白いことがありましたしね。それでね普段起きないようなことがおきたらすぐ取材班を行かせたん

です。

<松 村>それは、局を飛び出して、放送記者のような形で出て行って取材をして、電話か何かで情報を入れられるような形で？

<飛鳥井>そうですね。あの、当時は本当にスタッフが頑張ったと思いますね。少ない人数で毎晩やりましたからね。いわゆるディレクターチームと報道局チームが一緒になってやったわけですよ。それからもう一つの「タイムリー10」の特徴という、今では当たり前ですけども、いわゆるコメンテーターですね。私もではそれをゲストキャスターと呼んでいました。私がキャスターで、ゲストキャスターを曜日ごとにお迎えしたんですよ。今はもう当たり前ですけど、当時まだそんな制度はなかったんです。

ですから当時ゲストキャスターとしてご出演いただいたのが、とにかく異色で行こうと言うんでね、狂言の茂山千之丞さん、作家では山村美紗さん、邦光史朗さん、漫画家で精華大学の先生の吉富康夫さん、それから同志社の先生でABC朝日放送出身のジャーナリスト北村日出夫さん、歴史学者で森谷尅久さん、落語家の露乃五郎さん…。この方たちが初年度でしたかね。まあ、いろんなジャンルの方に出ていただこうと。毎日ゲストキャスターとして僕の横にお座りいただいて、全然ジャンルの違うことでもバンバン入って行きますから、何かコメントしないといけないわけで、それも面白かったです。

<松 村>今から考えるとちょっと早すぎたのかもしれないね。

<飛鳥井>そうなんです。早すぎたんです。山村美紗さんは推理小説描くから事件物やりたいって言うんでね、事件物を追いかけるんですよ。自分でスタッフつけて。実は一回事件物でね、ご記憶にないかと思いますが、京都ピストル強盗殺人事件がおきまして、犯人が逃げまわったんですよ。山科のスーパーかどこかでドンパチやって、逃げまわって、養老インターから名古屋に行きって浜松のほうまで逃げたんです。ピストルでドンパチやりながら。それでウチのスタッフは結局全部つきあいましたね。4泊5日くらいになっちゃってもう大変。途中で引返せないんですよ。犯人がどんどん逃げますからね。警察と一緒に頑張ってカメラと記者がどんどん追いかけるんです。ずっとレポート入れながら。着替えがなくなるし、金も当然無くなりますしね。大変な時代ですけど非常に面白かった。



<松 村>その後何年ぐらい続いたんでしょうか？

<飛鳥井>番組ですか？残念ながら短かった。4年ぐらいだったと思います。制作費的に持たないんですよ。小さなローカル局ではもう支え切れないんですね。

<松 村>だから、あったという記憶はあるけれど、そう鮮明に残ってないんですね。

<飛鳥井>残ってないと思いますね。

<松 村>「タイムリー10」という番組名はよく覚えているんですが。

<飛鳥井>ありがとうございます。

許永中事件から会社更生法へ

<松 村>その後、一旦 KBS はややこしい時代になるんですが…。私も詳しいことは存じませんが、大変になったというのはいろいろ言われているように思うんですけども、いずれにしても経営が苦しくなったことは間違いないんでしょうか。それともうちちょっと他のことに引っ張られてと言うことのほうが大きいんでしょうか。

<飛鳥井>実は、中にいる我々もよくわからないままの事件だったんです。真相は僕らも、僕自身もよくわからないんですが、仄聞するところと私の考えから言うと、経営の本体には全く問題はなかったが、当時の一部経営陣が闇のグループに踊らされたということのようです。いわゆる許永中、伊藤寿永光のあのグループに踊らされたと言うことですね。で、彼らがドンドン転がすために、当時の KBS の経営者を手玉にとりて、抵当に入れては住友銀行からドンドン金をいただくと。その親玉が許永中、伊藤寿永光ですね。

<松 村>脇が甘かったと言えば甘かったんでしょうね。それとちょうどバブルのあの時期と重なりましたから、世の中全体がちょっと狂ってた時代でもありましたからね。

<飛鳥井>まさにその通りでしたね。

<松 村>そういう時代がありましたけれども、でもまあ、今のところ KBS は一応軌道に乗っているということですね。飛鳥井さんご自身は、経営とは全く関係のないところでずっとお仕事をされてきたんですね。

<飛鳥井>そうですね。幸か不幸か現場だけできましたので、全くそういう経営サイドには入っておりません。

<松 村>と言うことは、苦勞されたのは予算的な問題だったりするんでしょうか。

<飛鳥井>制作費はまったく使えませんからね。現場は技術革新で他局はドンドン新しい機材が入ってくるのに、新しい機材が買えない。スタジオも新しくできない。それから制作費そのものがないから注入できない。ありとあらゆるところでその弊害が出ていましたからね。

<松 村>なるほど。

<飛鳥井>ある時、社屋、機材全部含めて124億円、住友銀行が抵当に入れちゃったんですね。それでこんな冗談言ってたんですよ。「おい、どうも社員は（抵当に）入ってないらしいぞ」と。結局それも全部チャラになりましたけれどね。住友銀行も踊らされた方ですから。

<松 村>そうでしたね。

<飛鳥井>KBS も踊らされた。そして結局返済は和解という形でチャラになったんです。

<松 村>だから、飛鳥井さんが辞められるころにはすでに…。

<飛鳥井>えーっとまだ、いわゆる会社更生法の真っ只中でしたね。終結したのが2、3年前じゃなかったでしょうか。巨大な負債ですからね。それで、住友銀行のほうは終結したと言っても、やっぱりいろんな方に負債をご迷惑かけてましたからね。僕らも、僕自身も会社に対しての労働債権は600万円くらい放棄しましたよ。ボーナスなどが全部未払いになりましたからね。

<松 村>そうですね。辛かったですね。

<飛鳥井>僕らは仕事は一応させていただきましたからそれはまあいいとしても、当然給料は上がりませんし、ボーナスは出ませんし。それを労働債権として届け出ましたけどね。確か僕で620万円だったと思うんですけど。

<松 村>うわ、きついですね。

<飛鳥井>それよりも、番組に出演していただいたタレントさんもそうですね。制作会社、納品業者の方もそうですし。市民・視聴者のみなさんに大迷惑かけたわけですよ。僕がお詫びしても、何にもなりません…。KBS の事件は不可解そのものだったでしょ。

<松 村>ただ、免許制だからある意味では助かった面もあるかもしれませんね。普通の民間企業なら潰れますよね。

<飛鳥井>潰れますね。潰れるのをそのまま見ているだけでしょうね。ところが免許制なので国も非常に苦勞しています。普通5年の免許だったのが、1年1年の免許になったんです。

<松 村>そうですね。そういう更新に変わったんですね。

<飛鳥井>国としてはそのまま認めて5年の免許は出せませんよ。必ず再建計画をきっちり出ささいということですよ。それで1年1年の免許です。実は当時国のほうもあまり会社側があてにならないので、というのも、ご承知かと思いますがややこしくなった後、またややこしいのが入ってきたんですよ。

<松 村>まあ、大体倒産するとなんちゃら屋っていうのが入ってきて言うのが企業の場合はありますけれども。

<飛鳥井>正義の味方ぶって入ってきて、自分だけはオイシイ汁を吸って去っていくんですからね。

<松 村>いやあ、複雑ですね。でもう、京都テレビのほうの



再建は一応は…。

<飛鳥井>そうですね。2、3年前に終了しましたのでもう大丈夫だと思います。

<松 村>飛鳥井さんご自身は、そこは一定距離を置ける立場にあるということですね。

<飛鳥井>そうですね。もう、会社のほうはリタイアしていますので。

これからの京都テレビへの期待 — 一個を中心に

<松 村>あのお、今の京都テレビでこんなことというか、こうしたいと思うことはありますでしょうか。

<飛鳥井>せっかくローカルな局なんですから、ローカルに密着と言うことでしょね。あらゆるところで、スポーツなんかは地元で密着して一番切り口として入りやすいですからね。スポーツにしる文化にしる政治にしる、なんでもかんでも地元にもっとも入りこんで、密着して行けたらいいなと思いますね。

<松 村>今のメディアなどを見て考えていることなど…

<飛鳥井>あまり偉そうな事は言えませんが、やっぱり自分は少なくともメディアでいろんな仕事をさせていただきましたが、実際にはマスメディアといっても核は個だと思います。だから、このパーソナルにどうやって働きかけていくか、あるいは、パーソナルをどういう風に自分の番組の中に反映させるかという。だからマスメディアと言いつつ一番なのが個であって、その個を大切にしていきたいなと。そうすると、例えばラジオにしるテレビにしる、かつて先ほども申し上げました「タイムリー10」という番組で、双方向でやって非常にやりがいがありましたし、市民の方々からも一定の支持をいただいたと思うんですよ。

それからラジオで言いますと、ラジオは何回か黄金時代を迎えていますけれども、典型的な物はリクエスト番組ですよ。深夜であれ、お昼であれ。やっぱりこれはパーソナルですよ。実際にパーソナリティとリスナーとは個と個でぶつかって行くという。それがひとつのブームになっていくと、マスメディアという大の組織がありますからブームになっていきますけれども、一番のスタートはやっぱり個ですからね。やっぱりラジオにしるテレビにしる、あるいは新聞にしてもそうだと思いますが、メディアというのは、もっと個人個人を大切に、個に対してもっとアプローチしていく必要がありますね。

かつてね、全然次元は違うんですが、30年ほど前にアメリカに行っていた時、夜中に帰ってきてテレビをつけたら、テレビショッピングをやっているんですよ。これがね、よく聞くと英語はさっぱりわからないんですが生放送なんです。生で実際にテレビ見ている人とつないで、電話で話ながらドンドン番組が進行していくんですね。これがまた面白い。当時まだ日本ではテレビショッピングそのものもやっていなくて、しかも生放送で。日本に帰ってああいうのできたらいいねって言う話をいろいろスタッフとしていて、実際、夜ではないんですが、生放送でテレビショッピングをやりました。かなりこれも面白かったと思います。アメリカなどは我々よりも一歩先へ進んでいますのでね。そうすると何



年か経って日本でもテレビショッピングが花盛りで、やっぱり生放送になってきました。

当時そのアメリカで夜中に電話をつなぐというのは、結局夜中独りで寂しい人がいっぱいいるんですよ。そういう寂しい人たちとつないで放送番組というのを作り上げているんですね。かなり遅れていますけれど、今日本もだんだん独りで過ごす人が多くなってきて、そう言う方々が楽しんでいただけるような番組と言うのも考えられますし。ただ今日本はテレビショッピングが多すぎてね、どちらかというと弊害のほうが大きいかも。貸し電波業みたいになっていますからね。ステーションが貸し電波業になってしまうと非常に寂しいですからね。特にこれからキーステーションを軸にターゲットになってしまっ、衛星時代にはいって、ひとつ番組作って上からバーンと流してしまうと、地方局は単に電波流しているだけで、まさに貸し電波業になっちゃいますからね。京都にある放送局だから、京都の人ともっとパーソナルにつながって、いろんな分野に入っていく、それがひとつの固まりになって、動きになるんだろうと思いますけども。

今の立命館大学、そして大学の役割

<松 村>さて、今の立命館大学を外から見ておられまして、どのように感じておられるでしょうか。

<飛鳥井>ただただ驚きですね。こんな事をいうと怒られますけれども、自分が在籍していた1960年から64年、その時代とは比較にならない。先輩としては恥ずかしい限りで、とても立命 OB なんて言えない位ですけども。これはやっぱりここにくるまでにいろんな方の努力があったんだろうと思いますけれどもね。ひとつには立命というシンボルにみんなが集まったんだと思いますが、その核になった方がその時代その時代で立命を良くしようとした、先見の明があったんでしょうね。単に立命、単にノスタルジックなものではなくて、やっぱり立命を良くしようという、その時々リーダーシップを持った方々が求心力があったんでしょうね。

<松 村>そうですね。思いますのは、伝統と言いますか、やっぱり重さがあるなと思うんです。ですから、そういうのが無ければそのような求心力が出てこない。やっぱり立命館大学の伝統というのはかなり重いと思うんですよ。この重さが新しい展

開に向かっていくのかなという気がするんです。そういうモノをみんな背負っているんだろうなと。

<飛鳥井> 僕もいろんな番組で、いろんな語り部として、いろんな事をやってまいりました。京都という土地柄、京都をテーマに多くのことをやりましたが、今おっしゃった通り、伝統なんですよね。伝統の街。それから京都人というのは排他的だとか保守的だとか言われますけれど、一番は革新性だと思います。何をやるにしても、同じ事をやるなら違うことをやろうとか、先頭切ってやろうとか。僕自身も、自分の放送という世界を見ても、大学時代の RBC も、非常に革新性がありました。あの時は末川先生という素晴らしいバックアップをいただいたんできたと思うんですけども。そういう意味で京都というのは本当は革新の街で、この革新の力、心が、それが新たな伝統や文化を創っているという意味がありますよね。

<松村> 私が思いますのは、人と同じ事をやりたくないんですよ。京都の特徴だと思います。他人の二番煎じをやりたくないんですよ。

<飛鳥井> そうですね、ありますね、ええ。

<松村> だから、新しいか古いかではなくて人と違うことがしたいんですよ。おそらく。でも、伝統がありますから、古いことをよく知っていますから、やたら新しくなるんでしょうね。

<飛鳥井> そうですね。勇気がありますね、確かに。

<松村> 絶対同じ事をしたくない。それはおそらく京都の特徴じゃないかと思えますね。

<飛鳥井> これはやっぱり京都の底力でしょうね。我々が京都に住んでいるというのは大変幸せなことですね。

<松村> そうですね。そういういろいろなものが糧にできる場所なんですかね。

<飛鳥井> 素材というか、素晴らしいモノがごろごろしているわけですからね。

<松村> 街のサイズ、地域のサイズもまあまあですから。東京のようなベター面という場所では無いというの。

<飛鳥井> いいですね、本当に。ぱっと見上げれば必ず山が目に見えますからね。もう、南はちょっと無理ですけど、東、北、西は確実に山が目に入りますからね。こんな100万都市はないですよ。

<松村> そうですね。ところで、今の学生諸君を見ていてどのように感じておられますか？

<飛鳥井> 学生さんねえ。優秀ですねえ。私も時々 RBC の講習会に来てくれと言われて行きますけれど、本当に素晴らしいですね。大阪ドームでの入学式や校友大会などで、幸い RBC の諸君がいろいろところで活躍しております。それを見ると自分の学生時代と比べて、あんなことは我々は絶対できなかったと思いますね。いわゆるショーとかイベント、イベントを構成する構成力、演出する演出力、それから当然前に出てそのアナウンスをするアナウンス力、それからいろんなバックで支える技術力、もう、すべてが素晴らしいですね。非常に良い才能を持っていますし、そしてそれを立命館大学という大学がうまく花開かせていると思うんですが。まあ、あえて苦言を呈すると、ちょっと画一的。ちょっと真面目すぎる。



<松村> ああ、なるほどね。

<飛鳥井> 古い言葉で言うならば、もっとやんちゃ性があっても良いと思いますね。例えば、RBC の話ばかりで恐縮なんですけど、新入社員が入ってきて歓迎会があると、80人から90人が入ってくるんですが、だいたい同じファッションで来るんですね。いわゆるリクルートファッションというのでしょうか。男性は黒の背広、女性は白のブラウスに黒のスーツという、みんな同じ格好で来るんですね。特に RBC は、何も無いところからひとつの番組を作るというクリエイティブなクラブですから、クリエイティブする者が人と同じ格好して来るというのが非常に危機感を覚えますね。

それで、何か一言と言われれば、毎回これを言うんです。何でみんな同じ格好してるの？ゼロからものを作り出す、番組なら番組、イベントならイベントを作り出すクリエイティブなクラブなんだから、これをいろんな人が作り出してやるんだから、みんなが同じファッションで来るというのは非常に違和感を覚えました。もっとやんちゃであって良いのではないかと思いますね。

<松村> 昔から立命はやんちゃが多かったんですけど。

<飛鳥井> ですよ。我々の世代は。

大学で若い人たちと接して

<松村> 先ほど他の大学でもちょっとお話されているというふうなことで、私が個人的にお伺いしたいことなんですけど、自分のキャラクターとお話というものの関係と言いますか、どう考えたらいいんでしょうか。これは質問なんですけど。

<飛鳥井> 幸い僕は大学でもそう言う講座も持っております。我々のひとつの刷り込みと言いますか、民族的に日本人は口べたなんだとか。それからよく言うのが「ウチは親も訥弁で声も悪くて、親譲りで私はダメなんです。下手なんです」という刷り込みがすごくきついですよ。決して僕はそんなこと無いと思います。みんな、素晴らしい能力を秘めていると思います。

私が今お邪魔している大学でも、一年間でガラッと変わりますよ。スピーチでも、いろんな発表もやってもらうんですが、最初4月の時は、教壇に立ったら下ばかり向いて全然顔は上がらない。声は小さくってわからない。こういう状態ですけど1年

やりますと確実に変わります。40人くらいのクラスでみんなの顔を見て堂々と話ができるようになります。自分の意見が言えるようになります。自分の意見が言えるというのは大切なんですよ。

私がやるひとつのやり方としては、NHKの--僕は民放育ちですけどニュースはやっぱりNHKがいいので--BSニュースを持ってきて15分間見せるんです。この中で一番どのニュースが気になったか、その理由をいう。肝心なのは自分自身そのニュースに対してこう思うという自分の意見が言えなきゃダメだよと言う。で、一分間言わせるんです。するとだいたい1コマ90分ですから、15~6人しかできませんけれど、だんだん良くなります。まずしゃべり方が非常に良くなりますし、内容が良くなってきます。同じニュースを捉えても見方が変わってきます。それから私はこう思うというのを必ず付け加えるんですが、自己表現が--書く表現という表現の仕方もありますが、私の場合は音声表現が専門なので音声表現が--きっちり自分でできるように。

これは訓練でグングン良くなります。非常に良くなります。4月に始まって実際には大学は1月で終わりですが、4月と1月では別人のようです。ですから何事も訓練。トレーニング。それとやっぱり自分を知ると言うことですね。先天性ではなく、話すと言うことはあくまで後天性のものですから。後天的なものというのはまず自分を知る、知った上で訓練する、トレーニングする。そうすると見違えるように良くなりますね。

<松村>せっかくの人間を、自分を表現しきれない事がしばしばあるんじゃないかと思えますね。

<飛鳥井>もったいないですね。

<松村>アナウンスと言うことでやられてきて、おそらく、今おしゃべりしておられる、それはもちろん訓練されたんでしょうけれど、その前に人間飛鳥井さんがおられた。何かそれが出てきている、にじみ出るような面白さがある。ちょっと言い方が変わってませんか。

<飛鳥井>いやいや、面白く聞いていただければ大変僕は嬉しいです。人を引きつける魅力というのはいろんなものがありますが、やっぱり面白いというのは大切な要素だと思うんです。ですから僕は、例えば主にテクニク的なこともよくお話しするんですけどね、テクニクの三大要素というのはちゃんと声が出る、ということですね。これはつまり、声の大小なんです。そして質なんです。良い声悪い声というのは、具体的に言えばちゃんとした必要の量とちゃんとした質で話せるということなんです。量は当然大小ですけど、質というのは口先だけでしゃべっていると質が悪い。人に信頼感、信頼性を持って聞いてもらえない。いわゆるお腹から出るちゃんとした腹式呼吸により発声された声というのは、それだけで人に信頼感を与えます。まず、声です。

次が音なんです。音というのはつまり、人に間違えて伝わらないように、正しく伝わるようにということなんです。これは極端に言うと口の形で決まってしまうんですね。おはようございませうと言っても、しっかり口を開けていうと爽やかに聞こえるし、理知的に聞こえます。口の開閉で、だらしなやかメリハリがあるかが決まります。

もう一つが話の組み立て方なんです。3月卒業式、4月入学式、いろんな偉い来賓の方がいらっしゃいますけれど、聞きたくないような話がどこまで続くのか、ということが時々困るんですよ。僕はいつも言うんですが、1分あったら絶対話せます。たとえ30秒でも伝えたいことは話せます。僕は基本的に話の組み立て方は逆三角形の法則で組み立てると思うんです。まず一番最初に新聞で言うこと見だしですね。しかもこれを100人いたら100人がこっちを向くような、魅力のある見出しをつけて、こっちに引きつけて、そして中身をつける。

もうひとつ肝心なのはフィニッシュなんです。フィニッシュをしっかりつける。体操競技でもスケートでも何でも、フィニッシュが決まらなると高い点数が出ませんからね。だからフィニッシュをしっかりつける。見出しに非常に魅力のある見出しをつけて、そして中身が肝心ですから、中身をきちっと。しかもこれは絶対欲張らないで、贅肉をすべてそぎ落としてエッセンスだけに。最後に、私はこのように思いますとか、こう考えましたとか、こういう事を話したんですよとフィニッシュをつければ大体1分と言えます。つまり、行き当たりばったりではなく、ちゃんと準備をすることが大切。こういう事を話してやりませうね、今の若い人は力がありますから、成長力がありますから、すごく良い表現ができるようになりますね。

<松村>これは、立命の学生にも聞かせたいですね。

<飛鳥井>機会があれば是非やりたいですね。

<松村>是非お話ししたいですね。本日はお忙しい中長時間ありがとうございました。

あすかいまさかず 飛鳥井雅和 プロフィール

1942.2.12生まれ

1964.3 立命館大学法学部卒業

1964.4 京都放送にアナウンサーとして入社
以来、ニュース・DJ・スポーツ・ワイドショー
葵祭、祇園祭、時代祭等各祭りで中継・開票速報
報道特別番組等あらゆる番組を担当
(これまでの主な番組)

●テレビ

タイムリー10 競馬中継
ニュースワイド京都 政治を語るetc

●ラジオ

あすかい雅和のこさげんフライデーetc

2002.2 定年退職

2002.3 有限会社 ASUKAI企画に所属し、フリーアナウンサーとして活動開始
司会・講演・社員教育・話し方指導・パネラー・コーディネーター等を活動分野とする

(現在のレギュラー番組)

「あぐり京都」JA京都提供
毎月第四日曜日 正午~0:30 KBS京都TV

現在、大谷大学 講師

京都橋大学 講師

裏千家学園茶道専門学校 講師

平成21年度経営学部社会人学生 同窓会春総会開催

5月17日(日)午後2時から京都駅東側の「がんこ」にて経営学部社会人学生同窓会が開催されました。

神戸、大阪で新型インフルエンザの感染が確認された翌日でもあり京都以西からの参加者の出席が危惧されましたが、神戸市内の高校で先生をしている岩上氏が校内での対応の為に急遽欠席、加古川市でお店経営をされている岡田さんから商用で少し遅れると連絡が入った以外は定刻に来賓の田中(照)教授をはじめとして同窓生が集まりました。

石本さんの開会挨拶でスタートです。

世話人会代表幹事による同窓会の近況報告では、新型インフルエンザ関連のその後の推移や、総会案内状に同封している返信ハガキの回収が低いので総会開催間隔や場所を見直す必要はないか等が提起されました。

中国からの留学生だった熊楠梓(ナンシー)さんを紹介しました。ナンシーさんは現在衣笠キャンパスにお勤めしておられます。

来賓の田中教授からは、現役時代の社会人学生の講義に対する真剣な勉強姿勢や、来年度に新設される新学部のスポーツ健康科学部(仮称)の情報、今後の社会人学生同窓会の継続に期待するとの祝辞を頂きました。あの独特且つジョークを交えた語り口は未だに衰えておられませんでした。

浜本さんの乾杯発生で懇親会がスタートです。

飲み放題スタイルで各自好みのドリンクで大いに盛り上がる中、今後の活動についても積極的な意見や提案が出されました。当面は年2回のペースで開催し1回は少グループでの勉強会、見学会、飲み会でも良いのではとの提案がありました。今夏はビアガーデンで暑気払いでもやろうと言う声もありました。

健康麻雀推進中の石本さん、賢妻賢母の浜本さん、家族の反対を押し切って参加された池内氏、仕事で途中参加の岡田さん、巨体を揺らしての酒井氏、不況の中でも会社が超多忙と今井氏、写真をお願いした安田氏、ダンディな和田氏とそれぞれ個性を発揮され2時間半の宴は無事終了しました。

-藤原記-



経営学部校友会 事務局よりの連絡

経営学部校友会は、

1. セミナーや講演会、シンポジウムを開催し、経営学振興と校友間交流を推進
2. 経営学部校友会会報の発行
3. ゼミ等の校友間ネットワーク強化の支援
4. ホームページを活用しての事業報告
5. 在学生・在学院生の勉学、研究、就職・進路に関する支援の推進
6. 校友への入会の積極的呼掛け

などの活動を行っています。

●「経営学とビジネスの振興」「人材育成および経営学教育の振興」などの目的で、【経営学振興セミナー】を年3~4回開催しています。詳細は決定次第、順次経営学部校友会ホームページに掲載します。

●経営学部校友会では、卒業後の校友間ネットワーク形成、ゼミ同窓会の開催に対する財政支援を行っています【ゼミ同窓会支援制度】。当該年度2回まで、1ゼミ同窓会開催に対して60,000円を上限で援助します。是非、ご活用ください。詳しくは、経営学部校友会ホームページをご覧ください。

立命館大学経営学部校友会ホームページ
<http://ritsba-kouyukai.jp>

編集後記

今回は、RBC(立命館大学放送局)出身の元KBS京都放送アナウンサーの飛鳥井雅和氏にお話し願った。もっともとうかがったのですが、紙幅の都合で短くせざるを得ませんでした。金融危機は实体经济に波及し、派遣切りだ何だと、あまり愉快でない話が多い昨今、何か夢のある話を聞きたい、そんな思いが飛鳥井氏にご登壇願った理由です。飛鳥井氏が蹴鞠の家柄の出身だというのは、今回インタビューする前に調べていて分かったことです。何とも高貴なお名前だとは、かねがね感じていたのですが、今回確認できました。こういう文化の香りのするお話しは聞いていて楽しい。2009年度総会講演会でも東昭二先生のお話でもうかがえるのではないかと楽しみにしています。(M)